（第三種郵便物認可）　昭和60年（1985年）11月22日（金曜日）　読売新聞　日曜版　☆14版☆　（4）

不信感除去へ対話ルール

米ソ首脳会談 専門家座談会

六年半ぶりに実現した米ソ首脳の直接対話は、来年からの首脳相互訪問、平和のための努力継続を約して幕を閉じた。年頭、経緯、考え方、すべてに対照的なレーガン、ゴルバチョフ両氏は、長時間のにザ詰め談判を含む、予想を上回る巧みな演出で、信頼醸成のムード作りに成功したといえる。しかし両首脳のスピーチ、発表された共同声明は、抽象的な表現ながら、多くの興味深い問題を示唆しているようだ。「始まりの始まり」ともいえるこの会談で、核戦争の危機は遠のいたのか。軍縮、地域紛争解決に進展がみられるだろうか。そして日本など米ソの同盟国、衛星国にどんなはね返りがあるのか。三人の専門家に話し合ってもらった。（敬称略）

出席者（五十音順）

伊藤 憲一　青山学院大学教授
中島 嶺雄　東京外国語大学教授
桃井 真　安全保障問題評論家
阿部 義正　読売新聞調査研究本部客員研究員
司会　外報部長

印象

再会談決定で当面危機回避

――まず、今首脳会談の印象からうかがいたい。

伊藤　個性豊かな両首脳が演じた一大ショー、パフォーマンス（演技）の印象が強い。会談時間の半分が二人だけの討議に費やされたことが、その例だ。合意の実体より、そういった演技が先行した。両首脳は何か〝新ジュネーブ精神〟のようなものが生まれたような印象をふりまいたが、まさに二十世紀のマスコミ利用外交のエッセンスを見たような思いだ。しかし、六年以上も対話がなく、こごえ切っていた米ソ関係が、レールに乗ったという意味では成功だと思う。

中島　核戦争をなんとか避けたいという意思が生まれたことに期待をかけたい。今会談は、従来の核抑止戦略から、戦略防衛構想（SDI）を前提とした新しい戦略を採用するかの分かれ目だったが、共同声明を見る限り、核抑止論の範囲内での相互削減という方向が出されたように思う。

桃井　両首脳が再会談すると決まったことに意義があると思う。少なくとも今後二年間は、大きな危機が発生しないか、縮小ないし回避できることを意味しよう。危機削減センターの設置やホットライン管理、軍縮問題だ。今回の会談に、双方とも軍部からは一人も来ていない。どうせ行っても出番はないと判断したのかもしれないが、ワインバーガー書簡問題でもわかるように（会談に対する）軍の反対論があるようだ。（共同声明でも）軍縮問題はまったく抽象的で大枠についてだけだ。いぜん、ブラックアウト（報道管制）が敷かれているようで核心部分は出てきていない。

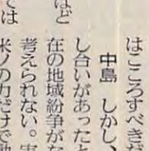
伊藤　双方とも国へ帰って反発を受けることはないだろうか。

中島　戦後四十年をふり返ってみると思わぬところで世界の緊張が激化し、軍拡の悪循環があった。今回は、こうした米ソの対立はできるだけ避けようということで合意できたことは意義がある。

――第三世界の立場からみるとどうだろうか。

中島　仮に、中国をとってみれば、中ソ関係を軸に考える立場から、軍縮基調になった今回の会談は歓迎していると思う。

桃井　これまでも地域紛争を阻止することの重要性が言われてきたが、それは、第二次大戦後の米ソ二大保安官的立場からであった。しかし、それも、ニクソン＝ブレジネフ時代になると核の問題は話し合われたが、よその国のことについては、お互いにどうこうしようというのはない。ただし、緊張緩和が伝えられると直後に別に介入が行われるという歴史の事実があるのはところすべきだ。


桃井氏

両国関係

レーガン後ソ連見直す

――米ソ関係の流れは変わるのか。

中島　首脳会談は従来は、相手の失点をつくパターンだった。今回、直前には、スパイ事件などそうした状況はあったし、相手を攻撃する前宣伝もすごかった。しかし、両首脳は今回、お互いにこういうことをしてはいられないという共通認識を持ったのではないか。だからこそ、従来の流れを変え、周囲でも驚くほど、首脳会談が進展したのではないか。軍拡コストなどお互いに悩んでいる。

伊藤　米ソの事前の激しい強硬路線の主張や、共同声明でも）軍縮問題はまったく抽象的で大枠についてだけだ。いぜん、ブラックアウト（報道管制）が敷かれているようで核心部分は出てきていない。

対日本

冷戦外交脱却日本も独自に

――今回の首脳会談が日本にどういう波及効果を持つだろうか。

中島　「北太平洋航路の安全」の項目で日本政府との協力をうたったことは、日本の国際的地位が上がった証拠だ。経済大国、特にハイテク先進国日本に対し、米ソ双方からまぶしい視線が投げられていることを示すものだ。ゴルバチョフ書記長が政策ブレーンとして親日家のヤコブレフ氏を党中央委員会宣伝部長に据えたこと一つをとっても、ソ連の対日アプローチが国益に徹している。だからこそ、両首脳は個人的親しみの雰囲気をかもし出せたのだ。二国間の問題だけ仰々しく列記してあるのは、米ソが互いに譲るものを腹におきながら、結果的に利害が一致したということだ。科学・スポーツ交流などに熱を入れてきたのは、七〇年代のデタントで得たような利益を再び手に入れるための下敷きをつくりたい、ということだろう。ソ連は今後、ユダヤ人出国や反体制派の人権問題など、実質的に何らかの反応を示してくる可能性がある。

伊藤　これまでソ連は、日ソ関係を米ソ関係の一要素としてとらえて、独立した日ソ関係などはなかった。つまり米ソ関係が凍結した時は日ソ関係も動きがとれず、米ソ関係が動くと日ソ関係も動いた。その意味でこれからが日ソ関係打開のためのチャンスとなる。しかし、問題は変化の中身だ。北方領土問題にしても従来より進んでいるというあかしを、ソ連が示すかどうかが重要だ。それを見きわめたうえでないと、ソ連につけこまれることになる。

中島　しかし、これまでの日本の対外交渉は、あまりにもソ連側のアプローチをけとばしすぎた。

桃井　今度のソ連の〝スマイル外交〟が返す刀で次は日本はかりでなく、中東でも東南アジアでも展開されてくると思う。しかし、これは同時にソ連の軍事力が減ることを意味しない。そこで日本としては、ソ連に軍事的展開を明らかな形で減らすよう要求するなど、ソ連に適行一致を迫らなければならない。また軍縮や環境問題については米ソ二国間にまかせるのではなく、日本を含め周辺国も参加していくべきだ。

軍縮

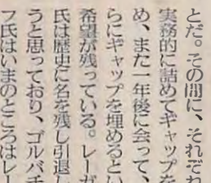
日本も軍縮参加を　桃井

SDI問題今後に残す

――両首脳が帰国後、今回うしようというのはない。ただし、緊張緩和が伝えられると直後に別に介入が行われるという歴史の事実があるのはところすべきだ。

中島　しかし、こうした話し合いがあったとしても、現在の地域紛争がなくなるとは考えられない。実際、世界は米ソの力だけで動いているわけではない。米ソの合意があったとしても、米ソだけではそれほど世界の問題を解決し得なくなっている。

伊藤　四大議題にあげられたにもかかわらず、共同声明では地域紛争三行、人権問題二行だった。これは、米ソ両国とも気力と体力がないからだ。ニクソン・ドクトリン後、アメリカは自由世界の警察官の役をになう気力をなくし、ソ連も民族解放やイデオロギーの旗をおろした。両国はもはや世界分割の体力がなく、紛争地域から手をひきたがっている。時代の流れが逆の方向に流れている。人権ということばも、人道的問題の解決という表現になっているが、地域問題でソ連が譲歩に応じたる専門家の前に立ちはだかっていた最大の壁だったソ連はSDIはソ連の報復能力を封殺してアメリカが先制第一撃をかけようとする挑戦ではないかと思った。


伊藤氏

中島氏

地域紛争

地域介入の気力なえる

――地域紛争についてはどう考えるか。

中島　地域紛争については相互に縄張りを設定することは避けようという意識が両首脳にはあったように思う。

――縄張りを再確認しようという話が出たとは考えられないだろうか。

中島　楽観視しすぎかも知れないが、なかったと思う。

伊藤　地域紛争の問題は、関係諸国があり、微妙な問題だ。だから、これに整理する声明文はわずか三行だが、軍備管理・軍縮に次いで多くの時間が割かれたと思う。用意したように、アメリカも自由の旗手として人権についてで行っていた交渉は、専門家の間にも本当に有益なのかという疑念があったが、「今後定期的にやっていこう」という表現で、その効果が期待されることに期待をかけたい。

ニクソン・ドクトリン以降、国益外交の路線を走り、ソ連もイデオロギーをいわず変わりつつあることを示している。今後、ソ連は日本に対してからっと雰囲気が変わったことも含め、すべてシナリオ通りだったと思う。それぞれの政権基盤を強化するのに利用したものだ。米ソ関係は個人的感触で流れを変えられるほど流動的でない。新しい時代が始まったという点では中島さんと同感だが、新データント時代を迎えたというほどの過大な期待を戒めたい。

桃井　重要なことは、ゴルバチョフ、レーガン両氏はあと二回会えるはずだということだ。その間に、それぞれが実務的に詰めてキャップを埋め、また一年後に会って、さらにギャップを埋めるという希望が残っている。レーガン氏は歴史に名を残し引退しようと思っており、ゴルバチョフ氏はいまのところはレーガン氏にそうさせておいて、次の大統領と会うことが可能だ。第二次大戦時のヤルタ会談を受けたポツダム会談の例がある。ソ連はスターリン氏だったが、アメリカは自国の原爆開発さえ知らなかったルーマン大統領に、イギリスはチャーチル氏が激怒に負けてアトリー氏に代わっていた。レーガン後の大統領との間で、世界の勢力分割問題など話が出てくるかもしれない。

中島　最近のソ連は、ミサイルがありながら、一方で事務用複写機も満足にできない社会であり、ソ連国民はうんざりしている。今のままでは二十一世紀を生き残れない。ソ連は今変容期にあるといっていい。ゴルバチョフ氏は未来に向かって、ソ連社会のカラを破っていこうとしている。

桃井　アメリカはソ連が必要とするところをうまく利用して、ソ連に入り込んでいくべきだ。ソ連の弱み、必要性を理解し、必要とするものを与えてやることにより、ソ連を国際社会に引き出していくべきだと思う。ソ連が必要とする技術を導入すれば必然的に開鎖的でいられなくなる。